

四、我が帝國內の言語

太古天神の大八洲國おほやしまをしろし召し給ひし建國の初より、最近十九世紀の中葉に至るまで、我が國土内に中心たるべき勢力を持つた言語はいふまでもなく國語即ち日本語であつた。然るに近時國力の發展するに伴ひ、漸次其の廣袤を擴張し、國語以外幾多の言語を包容し、此等が互に提携握手して世界の檜舞臺に活動せんとする勢を示して居る。今其等言語の分布と特質とを簡単に説明しよう。

(一)國語。内地に根據を有する所謂日本語で、内地の六千萬人によつて話されるのみらず、帝國領土内の何れの地にも通用し、歐米各國でも之を學習するもの少

なくない。ウラル・アルタイ語族に屬すべきものなるべく、添着的性質を帯びて居る
 (二) 朝鮮語。朝鮮半島内一千五百萬の人民によつて話される語で、國語同様、添着的性質を帯びウラル・アルタイ語族に屬すべきものであらうといふことは、既に前にも述べた通りである。

(三) アイヌ語。アイヌ族の話す言語である。或る學者は之を以て所屬不明のものとして居るが、大體の性質に於てウラル・アルタイ語族に屬する。此の種族は昔時は本州東北地方及び其の以南の地方にまで蔓延し、一時非常なる勢力を有して居たものであるが、現今に於ては大いに衰微し、北海道に一萬八千餘人、樺太に一千五百人位餘喘を保つて居るに過ぎぬ。千島にも少許のアイヌ種族が居るが、これは千島アイヌと稱して、北海道本土のアイヌ人と區別せられ、其の言語に於ても多少の相違がある。

アイヌ種族は前にもいへる如く、昔時は本州地方の可なり深い部分にまで入り込んで居たので、該地方の地名中にはアイヌ語を以て解釋せられるものが無いではない。北海道の地名などは今日漢字を以て巧みに書き表はされて居るものが

多いから、一見すると國語のやうにも思はれるけれども、實はアイヌ語に出でたものが多數を占めて居る。例へば國名の渡島(をしま 沈める土の義)、後志(おごし 大なる河の義)、町村名の小樽(おたる 砂の路の義)、札幌(さっぽろ 乾いた廣い場所の義)、國後(くわい 黒い島の義)、愛別(あいべつ 矢川の義)、幌内(ほろない 川の大なるの義)、苫小牧(とまこまい 泥濘の地の義)の如きは、何れもアイヌ語である。

樺太内の言語

(四) 樺太内の言語 我が國領土たる北緯五十度以南の地に於ける人口の總數は二萬五千人以上に達して居るが、其の大部分は國語を用ふる内地人である。内地人に次いで多數を占めて居るのは、所謂樺太アイヌの一千四百三十九名(明治四十年末調査以下同じ)で、其の言語は北海道のアイヌ語と大同小異である。其の他オロッコ族(二百三十四名)、ギリヤーク族(百三十九名)、キーリン族(五名)、サンダー族(二名)等が居るが、其の言語は何れもツングース語族に屬し、添着的性質を帯びて居る。

琉球語

(五) 琉球語 琉球諸島に行はれる言語である。國語と最も密接なる關係を保てる所謂姉妹語で、音韻及び語法の組織等に於て、國語の古い形を存して居る点が少なくない。音韻だけに就いていつも、母てて見音はア、イ、ウの三音のみ(エ及びオの長音はアイ及びアウの合成によつて成つた第二次的の音である)、子音は國語に存せざるものに、*si, ti, tu, di, du, yi, wi, wu*の如きも

のがあり、又カ行ガ行はチャ行ヂヤ行に、ハ行はパ行になつて現はれるものが多い。
 チエンバレン氏は此の兩語の關係を、印度日耳曼語族に於ける西班牙語と伊太利語との關係に比して居るが、事實上それより近いとも決して遠いことはない。
 (六) 臺灣内の言語　本島内の住民は、内地人(約十萬)の外、今より三百餘年前支那から移住した漢民族(約三百萬)と、本島固有の土着民たる蕃族とより成る。蕃族は更に之を生蕃と熟蕃とに區別するが、前者は他の種族と血を交へざるもの、後者は支那人と血を交へて漢俗化したものをいふのである。而して生蕃はタイヤ、ルブ、スンツ、オウ、パイワン、アミ、ヤミの六種族より成り、人口十二萬餘、熟蕃は其の數幾何も無い。

彼等の使用する言語を見るに、本島住民の大多數を占める漢民族は、臺灣化した支那語を用ひる。生蕃の言語は種族によつて多少の差はあるけれども、要するにマライ・ポリネシア語族中のマライ族に屬する言語である。又熟蕃の言語はもと生蕃のと同じであつたが、久しく漢民族と接觸するに及び、漸次彼等固有の言語を忘れ、支那語を用ひるもの多きに至つた。つまり臺灣内に於ける言語は國語

南洋諸島の
言語

の外、漢民族の用ふる 百節語族(孤立語)と生蕃の用ふる マライポリネシア語族(添着語)とを含むことになるのである。

(七) 南洋諸島の言語 最近世界的大戦争終結の結果、我が國の委任統治となつた マーシャル、カロリン、マリアナ諸島の言語を指すのであるが、此等は何れも マライポリネシア語族(添着語)に屬する。

以上七箇條に亘つて述べたところは、方今我が帝國の領土内に行はれて居る諸言語に關する説明であるが、之を系統上より觀察する時は、單音節語族、ウラルアルタイ語族、マライポリネシア語族を包容し、之を形態上より考ふる時は、孤立語、添着語の二種を含むこととなるのである。吾人は此等諸言語の性質が我が國の學者の手によつて闡明せらるべき時期の決して遠からざるを信するのである。